

虹の架橋

今月の題字
庵 (いおり) 進さん

(富山県八尾町)

ながめ余興場で開催された「越中八尾おわら風の盆」の代表者。初めて会った日から意気投合し、本番当日も庵さんたちの唄や踊りやお囃子に大感動しました。

まちなか交流館・蔵人新宇
ゆかたdeまま遊び 2019

「まちなか交流館」と、八月にプレオープンしたばかりの「蔵人新宇」(まちとあらら)をメイン会場にして九月十五日、第二回「ゆかたdeまま遊び」が開催されます。今年のメインテーマは、「今年はおきたい大間々」。今年はおきたい大間々。今年はおきたい大間々。今年はおきたい大間々。

ゆかたdeまま遊び 2019
いまま見ておきたい大間々
令和元年9月15日(日)10:00-17:00
ここからスタート まちなか交流館
蔵人新宇
お楽しみ品
お楽しみ品
お楽しみ品

虹の架橋を検索で、インターネットからでもご覧いただけます。



小耳にはさんだ
いい話
(文責・菊)
《289》
人間力とは智と情の総和

掃除を通して、自分たちの「心の荒(すき)み」と「社会の荒み」をなくすことを目的に活動しているNPO法人「清風掃々」第三十三号の巻頭言に日本を美しくする会相談役の鍵山秀三郎さんのメッセージが載っていて深く共感しました。これは鍵山さんが第十六回鍵山教師塾で全国の先生方に向けた言葉です。半世紀前までの日本人は、

「情」によって自分自身を制御していたために、穏やかな社会が保たれていました。「情」の力が「智」の劣っているところを補っていたのです。ですから、戦争によって国土が焼野原になるといっても曾々の惨禍に見舞われたにもかかわらず世相は今よりも落ち着いていました。その後、経済的な国力が増加するにつれて、教育の場と機会が豊かになり、高学歴の人が多くなりました。しかし、「智」の面は向上しましたが、それに反比例して「情」の力が衰退していったのです。学歴は高くなり、「智」の分野は著しく向上したのに、総合力である人間力は低下したのです。人間力とは「智」と「情」の総和です。「情」の面が退化すれば人間力という総和力が低下します。「情」とは、周囲の人に気を配り思いやることです。「智」の不足は「情」で補えますが、「情」の不足は「智」で補うことはできないのです。先生方には、数値で表わすことができる「智」のみの教育ではなく、「情」を育み、豊かな人間力向上を果たす教育をどうか施していただきたいのです。

「情」によって自分自身を制御していたために、穏やかな社会が保たれていました。「情」の力が「智」の劣っているところを補っていたのです。ですから、戦争によって国土が焼野原になるといっても曾々の惨禍に見舞われたにもかかわらず世相は今よりも落ち着いていました。その後、経済的な国力が増加するにつれて、教育の場と機会が豊かになり、高学歴の人が多くなりました。しかし、「智」の面は向上しましたが、それに反比例して「情」の力が衰退していったのです。学歴は高くなり、「智」の分野は著しく向上したのに、総合力である人間力は低下したのです。人間力とは「智」と「情」の総和です。「情」の面が退化すれば人間力という総和力が低下します。「情」とは、周囲の人に気を配り思いやることです。「智」の不足は「情」で補えますが、「情」の不足は「智」で補うことはできないのです。先生方には、数値で表わすことができる「智」のみの教育ではなく、「情」を育み、豊かな人間力向上を果たす教育をどうか施していただきたいのです。



鍵山秀三郎さん
お盆には、キュウリと茄子で精霊馬と精霊牛を作ってお供えしています。迎え盆は、ご先祖様に馬に乗って早く来てもらい、送り盆は牛に乗ってゆっくり帰っていただくという思いが込められています。無縁仏のために素焼きのお皿に御飯をお供えするというのも我が家の昔からのお盆のしきたりです。自分のご先祖さまだけではなく、無縁仏にも心を寄せるという日本人の考え方が美しいと思います。送り火をたきながら、いつか自分も送る側から送られる側になるのだからとしみじみ思いました。

標、旧小林眼科洋館、ジャガード刺繍工場見学など、普段は見ることができない町内の貴重な財産をめぐるコースもお勧めです。まちなか交流館では、明治昭和初期の引札(昔のチラシ広告)の展示や樹脂粘土、革細工、ミニリース、缶バッジ作成などのワークショップや足つぽマツサージョーナーや本格的ドリッパコーヒ、かき氷、おいしいパンケーキのお店なども出店します。インスタ映えする重厚な門構えと土蔵の蔵が建ち並ぶ蔵人新宇では、中庭でテントマルシェ(昭和初期の陶磁器、ハンドメイド雑貨販売)が開かれ、ポルダリング体験もできます。スタンプラリーに参加するとちよつと素敵な景品もプレゼントいたします。

なごめ余興場で開催した越中おわら風の盆の公演は昼の部・夜の部合わせて千百名のお客様で溢れました。なごめ黒子の会会員の中澤秀夫さんが写真係を担当し、後世に残る感動的な公演の一部始終をカメラに収めてくれました。舞台の背景をつくったのは、なごめ黒子の会二代目黒子頭の松島弘平さん。お盆休みを利用して製作に専念、八尾の街並みを切り絵風に再現し、舞台の雰囲気盛り上げてくれました。今回の公演でも有難い出会いとご縁が広がりました。出会いは心の花を咲かせてくれます。

世界一小さな
定利屋
トイレ美術館

今月の写真《289》
中澤秀夫さん『おわら風の盆』



靖ちゃん日記

令和元年八月十九日(月)
四時半起床。二十五度。虫の音が聞こえて秋の気配を感じる。虹の架橋二八九号の裏面が完成。残るは靖ちゃん日記だけ。気分転換に裏庭の草刈り。草刈りながら「キタサノササ」あふドッコイサノササ」という越中おわら節の合の手を思わず口ずさんでいた。八尾の人たちから越中おわら節の歌詞を教えてもらった。「鳴くぞおろろぎ 淋しゅうてならぬ お前ひとりの 秋じゃなれ色っぽい歌詞をもっと覚えたいな。笠を深くかぶった笠美人たちも皆、なごめ余興場で踊れたことを喜んでくれた。余興場の外で送りおわら節、た後にお客さんに「また来てね」と手を握られて嬉しくなった。「帯をきつく締めていたの、お美しいお弁当を食べられなかった」という女踊りの笠美人もいた。弁当の時に帯を解いてやりたかった。男踊りの越中ふんじりのなごめの方は解きたくはない。

第二百九十号は十月一日(火)発行予定です。

やっちゃんの似顔絵提供: ひさかさん